January 14, 2014
第 16 号

NEWSLETTER

Teacher Development Support Center

大阪女学院大学　大阪女学院短期大学

教員養成センター

●巻頭エッセイ　パスをつなぐ 1
●教育時事　「使えない」打破へ 1
●「英語の教え方教室」勉強会報告 2
・第 24 回勉強会、第 25 回勉強会 2
・第 26 回勉強会・第 27 回勉強会 3
●授業の玉手箱　「対義的な諺の活用」 4
●書籍紹介　『I am Malala: The Girl Who Stood Up for Education and Was Shot by the Taliban』 4
●教員免許状更新講習３案内 4

巻頭エッセイ　パスをつなぐ

夫　明美

カレンダー上では 2013 年が大詰めを迎えますが、学年暦では 2013 年後の 3/4 を終えようとしています。したがって、年度を締めくくるには少し気が早いのかもしれませんが、拙稿を今年度振り返りの機会にさせて頂きたいと思います。

2013 年は本学に着任以来、学外での研究・教育活動関連で「外に出て」、「外部の方々とのかかわり」を持つ多くのチャンスに恵まれた 1 年でした。ハワイ語保持活動に取り組む学校での授業見学、先生とのインタビューについては本センターホームページ内での拙稿に報告したとおりですが、別の機会でも、日系ハワイ移民に関する番組作成者にお会いしたり、山口県周防大島にある日本ハワイ移民資料館を訪問して、施設見学・資料収集や貴重なお話をうかがう機会を得ました。

詳しい内容については今後の原稿での報告に譲りますが、いずれの方々ともお話させていただきながら感じたことは、「今、私が見せていただいているもの、聞かせていただいていること」を担当授業を中心にして「どうやったらより良い形で学生たちへ伝えていくことができるか」ということでした。

いろんな機関や個人の協力を得て手元に集めることができた資料をボールに例えるならば、資料提供や資料使用を許可くださった方々は、私にパスを送ってくださったのだと思います。パスを受けることができた私は、次の受け手によいパスをつなぐ責任が生じたといえます。相手が受けやすい位置に、受けやすいタイミングでパスを送れるか？ひょっとしたら一回の試みでは成功することはないかも知れませんが、はじめに私にパスをつないでくださった送り手ともやりとりしながら、粘り強く、より良い方策を考えて実行しなくては、と気を引き締めています。それと同時に、私が今後もパスを送ってもらえるに値するように、視野を広くもち、対象へ適切にアプローチしていく姿勢を維持、向上させていきたいと思いました。

第 28 回「英語の教え方教室」勉強会（案内）

平成 26 年２月１日（土）　14:00 ～ 17:00

■「私の授業への挑戦」～英語Ⅱでいかに言語活動を取り入れていくか～
滋賀県立虎姫高等学校　　小財　久美　教諭

■「授業のつかみ」～集中力を増すウォーミングアップ・アクティビティ～
大阪女学院高等学校　　李　由紀子　講師

滋賀県の新進気鋭の小財先生と大阪女学院高校の元気ハツラツの李先生に実践指導紹介をお願いしました。小財先生には言語活動をいかに取り入れるかをテーマに英語授業での実践活動を、李先生には“つかみ”活動で学ぶ意欲を高めて主学習へと展開する授業実践についてお話いただきます。

教育時事

中井　弘一

「使えない」打破へ　小学校英語の教科化・中学英語、英語で授業

下村文部科学大臣が昨年、小学校の英語を正式な教科にすると英語教育の大方針を表明した。文科相は記者の質問に答えて「現時点でまだはっきりと固めているわけではない」としながらも、同省の計画では 2020 年度から歌や遊びを通じて英語に親しむ「外国語活動」を現行の小学5、6年生から小3、4年に前倒し、小5、6年は英語を正式教科として週3コマ程度、今の中学のように教科書や専科教員らによる指導をする。さらに中学は、今の高校のように原則として英語で授業をし、高校は討論や発表などの実践力を重視する考えであると発表した。小学5、6年で週2コマ増えると平日授業が全て6コマとなるため、英語の1コマ分は始業前などに分割する案を検討しているようだが、性急すぎると思われる動きである。現在の小学校の外国語活動に関しても、未だに賛否両論がある。

小学校の外国語活動の是非

メリット
- 吸収力の早い幼少期から英語に触れ、早くから英語に慣れる
- 英語に対する抵抗感を無くすことができる
- 英語に興味を持ち簡単な挨拶ができる
- 早期の開始により英語能力の向上、発音・リスニングが向上する
- 外国人に対する抵抗感が無くなる
- グローバル化の動きに対応した教育：国際理解に寄与する
- 児童の柔軟さを活かした教育：日常的な単語はすぐに覚える
- 保護者のニーズに応えられる（文部科学省のアンケートでは、67％の保護者が賛成）

ディメリット
- 論理的思考、自己の確立、外国語の習得には母語の習得が大事
- 英語の「あいさつ」「ゲーム」「歌やチャンツ」などの音声活動をしているだけで英語力はアップしない。英語教育ではない
- 英語の強制化による英語嫌いの増加：不安や戸惑いがある
- 日本語が不十分なのに、このままでは日本文化の衰退、国語力が低下する
- 教員の質に問題：教えられる教員が不足している。今の 40 万人の教員でどれだけ効果的な教育ができるのか？

これらは教科でなく外国語活動への賛否両論である。これが教科になるのである。高校英語で求められるディベートの手法で考えると、importance, impact, effect がどのようなものかをまず判断する。そして、その政策に対しどのような value があるのか、たとえば、教育の重要性として10年後のグローバル社会を見据えたものであるべき／思考力の育成が優先で国語力の強化こそが日本が国際化社会で生きる道、などと検討する基盤の考え方を定めることが重要になる。これに priority, practicability などを縦軸にさらに検討することが必要である。

practicability としては教員の質と量の確保が大きな課題となる。文科省は、中学英語免許を持つ教員や外部人材による指導を見込んでいる。また、中高教員には「英検準1級以上」の能力を確保するため、外部検定試験で定期的に検証し、レベル以上の教員が何割いるのか公表するとしている。英語科の教員だけがいつも能力チェックを受けることになる。今の英語教育の流れはこれでいいのだろうか。

特　集

「英語の教え方教室」勉強会　簡易報告

報告：中井弘一

第 24 回：創造力を育てる授業をめざして―実践活動紹介―
第 25 回：大阪女学院大学　教職フィールドワーク　課題研究発表
第 26 回：英語の授業は英語でを考える
第 27 回：英語表現Ⅰの授業をどう教えるか―現状と課題―

第 24 回「英語の教え方教室」勉強会

平成 25 年7月 13 日（土）

「創造力を育てる授業をめざして―実践活動紹介―」

滋賀県湖南市立石部中学校　山口　朋久　教諭

山口朋久先生に、「既習表現を使った創造的なプラス1センテンスの英文づくり」、「身の回りの表現を使った話す活動」、「ペアやグループ学習を中心とした共同学習」について、それぞれの活動を紹介していただいた。発表された内容は、学びのステップの組み方など大いに参考になるもので、きめ細かな指導への配慮や段取りの設定には感心するものがあった。

山口先生の活動のプリンシプルは、「達成感を持たせる」「やってみたいと思わせる」「時間制限を設ける」「生徒に恥をかかさせない」「休み時間や家庭でも練習をしなければならない課題を行う」であった。

本課に入る際に、「チャイムの歴史について4つの絵を描き、その絵を 30 秒以内に発表する」というゴールを予め生徒に伝えておき、どのような課題を生徒はこなすことになるのかその準備をさせておくことから始める指導を、何人かの生徒の活動の様子をビデオで見せ紹介された。生き生きとした活動であった。生徒の中には、本課の英文には表れていない行間を読んだ文章が足されていることがあり、その場合評価を高くしているということであった。そうした表現が出てくることこそが教えているものにとっても喜びであるとのことであった。口頭発表を行うことで、生徒の満足感を持たせたいという考えであった。

通常、サマリーなど内容の概略は直接英文を書かせることが多いが、まず 4 コマの絵を生徒に描かせることはどのような効果があるかを参加者で話し合った。中学の先生からは、こうした段階を踏んだ方がいいという実感を共有される意見が多かった。高校でよく行われているサマリー・ライティングの初期の段階では、教員が要約した文章にいくつか空所を設けておいて、そこを埋めさせることで済ませることが多い。それをサマリー・ライティングと呼ぶことには違和感がある。それが山口先生のやり方と決定的に異なることは、課題活動への生徒の参加度である。言語活動は生徒が主体的に行ってこそ学びに繋がる。授業の進度を考えたりして、形式を教えることで「指導した感」を持ってしまうことでは、生徒の学びは期待できないであろう。この絵にすることの利点は、英文の内容を情景的に描く曖昧さが生徒の affective filter を下げることになっている。そして自分が描いた絵からそれを説明する英文を考えていく過程が活動への engagement を強固にする。中学生段階では有効な指導方法である。

考慮すべきことは、「絵」を基としているので教科書の英文が直接自分の英文の言葉に変換されないことである。「絵」という「中間言語」が助けになっていることを将来的にはいかに省いて、文字を通して思考、判断、表現をするか、高校段階では一層工夫すべきではないかと改めて感じた。しかしながら、これほど考えて活動を組み立てて行ってられる中学校での活動を活かす工夫が高校には求められる。リプロダクション、リテリングの活動をどう行うかである。

次に「身の回りの表現を使った話す活動」の一例を紹介された。“Have you ever ?”の表現活動で、この表現は相手にこんなコトしているのかな、やったことがあるかどうか尋ねて見たくなる表現と説明し、相手に質問するこの表現の使われ方を説明するとのことだった。次に、これまで生徒が尋ねた質問例やその動詞の活用を併記したお助けシートでプレタスクを行い、発展的にこの目標表現を使った質問を自分で考えて数人の生徒にインタビューする。その結果をまとめるワークシートにも段階があり、最後に尋ねた回答の中から一つ選び数行の英文でまとめてその内容を記載するというものであった。きめ細かい指導の工夫に一同感心した。

第 25 回「英語の教え方教室」勉強会

平成 25 年 10 月 19 日（土）

「大阪女学院大学　教職フィールドワーク　課題研究発表」

学生　桑田紗佑里、奥村愛理、田井寛子、平岡麗南、中村沙貴、大杉日登美

教職フィールドワーク（英国）に参加した 6 名の学生の課題報告プレゼンテーションを行った。学生達は、彼らの持てる現状の英語力で、プレゼンテーションをすべて英語で行った。報告発表内容は、

1. Brief explanation about the students' presentation at Manor School (Each group 5minutes)

2. Introduction of teaching materials & reports on class observation at Manor School (Each person 20 minutes)

Class Observation at Manor School

1. Students are very active.

In class…

- Students raise their hand and ask questions when they cannot understand.
- Students always express their opinion to their teachers immediately.

2. Teachers try to be on good terms with students.

- Teachers are very friendly to students.
- Teachers praise their students many times.
- Some teachers give students a seal(sticker) when they do good work in class.

3. Making much of Individuality

- Teachers regarded their students as adults to be.
- Each student must have their responsibility in their behavior.
- If they do not obey some rule, they sometimes take a penalty.
- Teachers accept various characters of the students.

4.Inductive learning

- Science (about acid rain)

Students conducted the experiment first.Then the students read the textbook and got some knowledge about acid rain.

- Math

Students solved the question in some groups. → The teacher did not tell them the formula first, so students had to think how they could solve.

- Teachers often ask why the students give their answer in that way.

参加の先生方からは、学生が回答しやすい質問やじっくり考えないと回答できない難しい質問をいただいた。

- 現地の中学生は active で質問も進んでするということだが、何がそうさせているのか、その要因は何か。
- Inductive learning(teaching) を行っていると聞いたが、どのように押し進めているか。deductive learning (teaching) と比べどちらがいいのか。あなたの考えは？
- 日本では英語の授業は英語でといわれているが、フランス語の授業が英語で行われているとのこと、それは効果的であったか。

など、学生にとって良い経験になった。学生なりの視点で作成した教材も現場の先生には新鮮であったかも知れない。残りの時間を、私の方から教材紹介した。詳細は本学HP教員養成センターに掲載している。

第 26 回「英語の教え方教室」勉強会

平成 25 年 11 月 16 日（土）

「英語の授業は英語でを考える」

滋賀県立水口高等学校　吉野　欽哉　教諭

「英語の授業は原則英語で」を求める学習指導要領の指針に対し、学校現場の実際として英語学習に消極的な生徒が多い中どのようにこの指針に臨んでいるかが今回の吉野先生の発表の趣旨であった。

冒頭、勤務校に様子について話された。部活動や生徒会活動が大変盛んで、生徒は学習活動に対しても自らの課題に対しても誠実に取り組んでいるので大変好感が持てるが、学力面で自信を持つ生徒はまだまだ少ないと言わざるを得ない。英語が得意な生徒もいるが、多くは英語の学習に消極的であると生徒の様子を話され、そうした生徒の教育を担っていくために英語の授業で日頃、気になること・心掛けてられることを以下のように話された。

①まず、授業者が授業を「楽しむ」

・授業者が「楽しめないもの」が、生徒たちに面白い・興味深い訳がない。

・授業者が「楽しめないもの」に、気合いは入らない。

② Be Easy!

・「大きな何か」よりも、できることから、着実に・・・・

・まず、授業者が「気楽に」英語を使う。間違うことが、「大前提」

・生徒や自分（授業者）を責めない。但し、「振り返り」はしっかりと！

③（授業や活動の）目的を明確化

・目的が分からないと、学習が受動的になる。

・学習が受動的だと、授業は沈静化しがちになる。

1．「授業者が授業を楽しむ」とはどのようなことか

授業者が内容や表現に関して面白いと思う教材や素材を取り上げるよりは、生徒が「今日の授業は分かった」と思ってくれる授業をすること、生徒の理解と成長がみられる授業こそが楽しい授業と話された。つまり「分かる授業」を行うことが授業者が「楽しめる授業」ということである。content-based learning というより、英語の基礎能力の育成、英語を少しでも楽しいと思えるよう、まず分かる授業が先決問題であるという考えであった。その上で「使う」英語の活動などを行っていくことであった。

フロアーから齋藤孝氏の mission, passion, high tension の 3 要素を言及され、吉野先生の「気合い」ということにつながるのであろうとの指摘があった。教員のテンションも生徒が楽しい授業と思える要因の一つと言える。

吉野先生は英語の授業を英語でといっても、担当している生徒の英語力を考えると、まず語彙力、発音する力、それに反復を指導の根底に据えていると話された。

2．Be Easy!

情意フィルターを低くしないと生徒は自ら英語を使うことをためらう。授業で生徒に解答などの英文を板書させると、たいていの場合、先生に近づいてきてこっそりと「こんでええ？」と小さな声で確認して欲しいと願うそうだ。皆の前で間違っていたら恥ずかしいという思いを持っている生徒が多いので、間違ってこそ次へ伸びる－そういう雰囲気づくりを心がけているということであった。

3．目的の明確化

多くの目的を掲げず、これだけできれば良いというように目標設定をしているとのことであった。確かに目標がいくつもあると、生徒にとっては容易く達成感を得られるものではないだろう。

このあと、11 月 6 日の研究授業で行われた授業の指導案をもとに実践内容のお話をしていただいた。音読の指導例として、一回目の音読時間の短縮を考えさせ、省略すれば良いとの返答を生徒から得て、2 回目の音読では、音のつながり、最後の子音は控えめになどをスラーの記号などを付記した 2 枚目のプリントを配り、リエゾンなどを意識し音を短くする音読を行うと時間の短縮を図ることができたと報告された。

第 27 回「英語の教え方教室」勉強会

平成 25 年 12 月 7 日（土）

「英語表現Ⅰの授業をどう教えるか―現状と課題―」

和歌山県立那賀高等学校　加藤　統久　教諭

発表者の加藤先生には、相当量の資料を用意していただき単身赴任先の和歌山から直接駆けつけていただいた。感謝である。報告は、自己紹介の様子をその場で再現されることから始まった。レ・ミゼラブルのエポニーヌが歌う“on my own”をアカペラで皆の前で歌われたのにはびっくりした。ただ、この歌の歌詞に相当の思い入れがあるのだと感じられた。

次に授業実践の話に移った。加藤先生の「英語表現Ⅰ」授業の特徴は、コミュニケーションの帯活動を取り入れられていることである。文法シラバスの教科書が多い中、もっと表現活動を取り入れるべきではないかと考えられてのことであった。授業は帯活動後、教科書の回答の点検を行い、そしてその単元の文法を使った表現活動を行うとの 3 段階を踏まえるという構成であった。つまり、コミュニケーション力育成帯活動――文法解説・問題解答――ターゲット文法を使う表現活動を 1 時間の授業の学習プロセスとされていることである。

まず、帯活動のコミュニケーション活動を紹介された。その際にユニークな席替えも実践披露された。1 ヶ月以上固定されたペアで活動するより毎週異なる人とペア活動を行う方が新鮮であるとの判断で、トランプカードでその数字毎にペアを組んだ座席表を用意しておき、生徒に 1 枚ずつカードを引かせて席を決めるというものであった。参加者もカードを引いて新たな席にペアとなるよう着席した。

そのペアができあがったところで、ワークシートを用いて帯活動としてのコミュニケーション活動を行うということであった。今回は自己紹介を英語で行う活動を参加者も実際に体験した。質問項目には、His/her favorite movie, and the reason: などの項目が書かれてあり、その項目を見てそのことを相手に尋ねる英文を生徒自身に考えさせて尋ねさせることをねらいとされていた。質問英文まで用意しておくと、生徒はあまり考えずに相手に尋ねることになり、効果的でないとのことだった。ただ、それでもうまくいかないときの補助シート（Can you make a question instantly?）も作成されて、たとえば、favorite TV program /movie には、What is your favorite TV program or movie? と尋ねると対になったカードを使っているとのことであった。また、和歌山県教育委員会の英語教員向け教材ホルダーにある「高速インプットシート」も紹介された。これは、Nice to meet you. /Good morning./ Are you from Australia? /Is English interesting? /What's your favorite subject?/ What do you have for breakfast?/ How many brothers do you have?/ Does Ichiro p1ay baseball well? /Does our English teacher play the piano? などの簡単な英問を、連続 20 項目速射的に相手に尋ねて相手の答えをすぐに引き出す活動であった。この 20 の質問項目は文法・語法で分類されているようであった。参加者でこれらを体験した。参加者での討論で、帯としてのコミュニケーション活動の内容は独立しているものでなく学習事項に関連があるもの、沢山の項目でなく一つ時宜を得た質問はどうであろうかなどの意見があった。用意されている質問は生徒自身が相手に尋ねたいと思う内容でなかったりする、尋ねたいと思うことを尋ねさせることが大切であろうとの意見もあった。高速インプットは聞き手が素早く回答させることにおいて意味があるであろう。ただ、深く考える質問内容ではないのでそれだけでいいのだろうかなどの意見が出た。knowing what に終始する問いかけは飽きがくるのではないか、why, how を尋ねるようにさせることが望ましいのではないかと意見を交わした。

加藤先生は、表現活動として Grammar composition cards を作成されていた。受動態が学習項目のカードには写真と過去分詞の動詞が記載されていて、グループでカードをめくりその情報をさっと読み取りその情報を受動態の文章で声に出して素早く言い合う競争的な活動を取り入れられていた。生徒が楽しく活動している様子をビデオで確認した。ユニークな活動であった。

授業の玉手箱

対義的な諺の活用

中垣　芳隆

思わしくないことが続くと One loss brings another.（二度あることは三度ある）と嘆き、事態好転、逆転ホームランとなると The third time pays for all.（三度目の正直）と喜ぶ。　私たちは、意識的にあるいは無意識のうちに、人口に膾炙した真逆の意味合いを持つ諺をその場に応じて使い分け、自分に言い聞かせ納得させているようです。

洋の東西を問わず、諺は人々の英知の結晶です。長い間の経験に裏付けられた真理や教訓、あるいはユーモアが、短く、人情の機微をついた形で、日常生活のあらゆる機会に引用されています。

生徒の Vocabulary を増やす手段として対義語（Antonym）がよく活用されますが、人生の正解は一つではないことを、一歩進んで対義的意味合いを持つ諺を通して感じさせるのも授業のちょっとした spice になるかも知れません。

対義的意味合いを持つ諺を2、3拾い上げてみますと

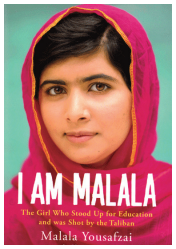
Haste makes waste.（急いては事をし損じる）
It is good to make hay while the sun shines.（善は急げ）
Nothing comes of nothing.（蒔かぬ種は生えぬ）
Everything comes to him who waits.（果報は寝て待て）

日本人は、勝ち組・負け組という物言いに表されるように、一般に白か黒か、善か悪かと二者択一的にどちらかに決定しないと気のすまない国民であるといわれます。しかし、人生とはそんなに簡単に割り切れるものではないことを、先生方それぞれの経験を Proverbs を通して語られると、生徒達の価値観に新たな刺激を与えるのではないでしょうか。

書籍紹介

"I am Malala: The Girl Who Stood Up for Education and Was Shot by the Taliban"

Malala Yousafzai、Christina Lamb（2013）、Weidenfield & Nicolson、￥1,825　13.99 ポンド



女性が教育を受ける権利を訴えて、イスラム武装勢力に銃撃された 16 歳の少女マララ・ユスフザイさんの手記。

Prologue: The Day my World Changed は次のように始まる。

I come from a country which was created at midnight. When I almost died it was just after midday.
One year ago I left my home for school and never returned. I was shot by a Taliban bullet and was flown out of Pakistan unconscious. Some people say I will never return home but I believe firmly in my heart that I will. To be torn from the country that you love is not something to wish on anyone.

Now, every morning when I open my eyes, I long to see my old room full of my things, my clothes all over the floor and my school prizes on the shelves. Instead I am in a country which is five hours behind my beloved homeland Pakistan and my home in the Swat Valley But my country is centuries behind this one. Here there is any convenience you can imagine. Water running from every tap, hot or cold as you wish; lights at the flick of a switch, day and1 night, no need for oil lamps; ovens to cook on that don't need anyone to go and fetch gas cylinders from the bazaar. Here everything is so modern one can even find food ready cooked in packets.

This book will make you believe in the power of one person's voice to inspire change in the world. 金原瑞人、西田佳子 (2013/12/3) の訳本として『わたしはマララ：教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女』が発行された。　（中井　弘一）

大阪女学院大学「教員免許状更新講習3」平成 25 年度講習

平成 26 年3月8日（土）9：10 ～ 16：40

http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc/certificate

「言語文化としての英語表現－英語の発想・日本語の発想と生き生きとした英語表現活動 ー」

・「生の英語表現」－言語と文化の関係性や言葉の力の理解－
東條 加寿子　大阪女学院大学 教授

・「生き生きとした英語表現活動」－日英感覚の違いから起こる英語表現の味わい－
中井 弘一　　大阪女学院大学 教授

■ 講座のねらい

本年度から高等学校では「英語表現」という科目が英語授業に導入されているが、その教科書は文法解説と和文英訳の域に留まっているように思われる。

本来、英語を学ぶということは、英語圏の文化と思想を学ぶことであり、異なるものの見方を身につけることを通して世界を別の観点から読み取ったり把握したりすることでもある。英語教育においてコミュニケーション活動の重要性が一層増している中、英語表現を通して意味のあるコミュニケーションを行うための基盤的な言語文化の理解を深めることを本講習の目的とする。

第一部では、国際社会の様々な場面をとらえ、メディアを介して私たちが接することのできるいわゆる「生の英語表現」を取り上げる。そこでは、どのような英語表現が使われているのか、どのような情報やメッセージを伝えようとしているのか、そして背景にどのような文化や発想の違いがあるのかを考え、言語と文化の関係性や言葉の力を理解するとともに、「生の英語表現」を学ぶ喜びを引き出すヒントにしたい。第二部では、「英語という言語を知る」を基調テーマに、「発音・音読による英語表現」、「日英感覚の違いから起こる英語表現の味わい」、「英語で表現する楽しみ・創作表現活動」など英語教室での実際的な活動を取り上げ、ワークショップ形式を通して「英語表現」という言語文化を体感しながら、明日の授業を展開するための基盤構想力の育成に努める。

■ 定員・対象

中学校英語科教員・高等学校英語科教員　計 30 名
（定員を超える場合は申し込み先着順にて締め切り）

■ 受講方法

○ 受講申し込み受付
平成 25 年 12 月 16 日（月）より 2 月 21 日（金）までに大阪女学院大学　教員養成センター「教員免許状更新講習」担当（ttc@wilmina.ac.jp）へお申し込みください。
○ 受講料　5,000 円（所定の口座へ振り込み）

編集後記

1 年経つのがとてもはやく感じる。*You can't turn back the clock, but you can wind it up again.* である。時間は取り戻せないが、もう一度ねじを巻いて新しい年を starting over しなければならない。小学校での早期英語教育実施の検討、中学校でも英語の授業は英語で行うなどと、日本の英語教育には旋風が吹き荒れている。こういう時こそ、しっかりとした教育哲学をもって日々を迎えたいと思う。しっかりねじを巻き直して頑張りましょう。

大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
教員養成センター Teacher-Develpoment Support Center
540-0004　大阪市中央区玉造 2 丁目 26 番 54 号
Tel: 06-6761- 9371　Fax: 06-6761-9373
Homepage: http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc
e-mail: ttc@wilmina.ac.jp